

油山の宝物さがし ～父から聞いた山のこと～

代々、地元に住んで来られた方は、ご先祖様からの言い伝えを含め、山にかかわる記憶をもっておられます。このたび油山の麓で生まれ育たれた80代の男性の方から、お父様が語られていた山のこと等うかがいました。

とき 2013年4月16日(土) 10時～12時
聞き手 岩尾、柴戸(記録)



《花畑園芸公園のため池そばから油山方面を見る。

右の四角は中央展望台。左の鉄塔の送電線は夫婦岩展望台付近からいったん山かけにはいる。このあたりから芝生広場付近までの林道の上下が市有林。2013年6月撮影》

■ 樋井川村村有林の購入がかなわなかったこと

昭和4年に樋井川村は福岡市と合併した。準備として樋井川村村有林(現在の市民の森の中の福岡市市有林部分)は売却することになった。当時樋井川村が村有林につけた評価額は2,000円。

30歳前後だった父は、山を持ち、植林すれば50～100年後には材木が高く売れると考えていた。そして1,000円用意したが、あと1,000円をもって共有しようという人が出てこず、村有林はそのまま市有林となった。

■ かわりに買った小笹の山

準備していた金で父は小笹に山を買った。今、平尾壺園になっている場所は当時陸軍の射撃場で、そのそばだった。ガスがない時代なので、山の木は燃料屋が立ち木で買ってくれた。

終戦後、この山は市に売ることになった。市が、海外から引揚げて来た人達に農地として払い下げるためだった。しかし小笹は赤土の粘土質であるため、結局、農業に向いていなかった。そのため、後に、市は入植していた人達から土地を買い上げ、区画整理した。

父は、昭和はじめ小笹でなく、樋井川村村有林が買えていたら、戦後、市に山を売ることもなかったろうに、と家から油山を見ながら話していた。

■ 様々に使われたマツ

私の家には数百年生のマツがずらりとあった。当時は船材などによくマツが使われた。しかし戦時中、陸軍歩兵24連隊が軍で使うのに持っていった。

また、小学校の時、私達生徒が民有林のアカマツを馬車道まで担いで出す手伝いをしたことがあった。用途は炭坑の坑木で長さ2m50cmくらい。生木なので結構重かった。

■ 燃料、水

昭和37年くらいまで、炊事に薪を使っていたように思う。自宅に隣接して山があった。マツの他、シイ、クリ、クヌギなどあった。

BOX

※はともに福岡市総合図書館蔵

○ 大正10年の樋井川村の財産表より 不動産の項 ※「早良郡志」大正12年刊 福岡県早良郡役所編
宅地：6坪/48円、田畑100歩/5円、山林原野：(基本財産65,313歩/3,900円)(其他10,424歩/987円)、建物504坪/15,000円

○「政府は昭和二十年十一月緊急開拓事業の実施を決定し、外地引揚者、戦災者、帰農者等を対象として混乱時における農業の人口の吸収安定を策すると共に食料増産の一方策とした(中略)福岡県に在っても(中略)兎角の比判を浴びながらも既に一万三千町歩近くの用地を買収し内一万二百数十町歩は入植者並びに増反者に売渡され現に耕作に供されている土地は六千町歩以上に及んでいる。」

※「福岡県に於ける開拓」昭和28年刊 福岡県総合農業振興計画委員会編 まえがきより